世間解　第四〇二号
令和三年　八月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

―本願招喚の勅命―

八月であります。落ちつかない日が続く上に暑さが襲ってきています。皆さまには小まめに水分補給を繰り返していただき、どうぞお身体お大事になさってください。暑さの中ではありますが、どうぞ、ご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続、ご聴聞くださいませ。

アレ？と思われましたでしょうか。〈お念仏ご相続〉はわかるけど〈ご聴聞？〉と思われた方がいらっしゃるかもしれません。

もう二十年近く前になるでしょうか、ご往生になられた豊島学由という先生がお会いになったお同行さまのお話であります。

先生はこうおっしゃっていました。

『…そのお方はね、もうズーッとお念仏なさる。ほっといたら一日中でもお念仏なさっている。でもねそれだけじゃないんです。時々ね「ハイ」とおっしゃる。「なんまんだぶ、なんまんだぶ。…ハイ。」「なんまんだぶ、なんまんだぶ…ハイ。」よそから聞いてたら“この人何いうてはんねやろ”云うようなもんです。自分の称えたお念仏に「ハイ」いうて返事してんねんからね“変わった人やなぁ”いうて思うかも知らん。でも違うんですね。「なもあみだぶつ」というお念仏は阿弥陀さまの“お前を救わずにはおかんぞ”というお喚び声なんですからね。「なんまんだぶ」「ハイ」これでええんですね…。』

ざっとこんなお話しだったと思います。

この『世間解』では毎回、毎回〈お念仏ご相続させていただきましょう。〉とお聞かせをいただいております。

「浄土真宗には“行”が無い。なんていう人がいるけれどもとんでもありません。お念仏は大行といわれるこの上のない行なんですよ。ただの行じゃないんだ。私が称えながらそれがそのまま阿弥陀さまの喚び声である。仏行としての徳を持っている。」　梯實圓和上のお言葉であります。

「まぁ、とにかくお念仏することだな」これも梯和上。

「私の恩師の遠藤秀善和上はね晩年によく“儂はこの頃お念仏に〈さま〉を付けて称えさせてもらうことがあるんだ〈なもあみだぶつさま、なもあみだぶつさま〉と…”とおっしゃってたけどこれほんまやと思うわ。」これも梯和上からお聞きしました。

私が、私の声で私の口から称える「なもあみだぶつ」でありますがそれはそのまま阿弥陀さまの「お前さんかならず浄土に生まれさせてみせるで」というお喚び声なのであります。

桐溪順忍和上は「ご開山さま（親鸞聖人）のお教えくださった阿弥陀さまのお念仏、お称名というのは名を称えると書いてあるけれども、称えものではなしに聞きものでないんかいのぉ」とおっしゃっていました。

すべて親鸞聖人のおっしゃった「本願招喚の勅命」というお念仏のお領解に対するお味わいであります。

私が「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏出来ていることは、あるいはお念仏が聞こえる所に居れていることは阿弥陀さまやご往生くださった方々が色んな事にあい、色んな思いを持ってゆかねばならない私を決して途切れることなく願い続け支え続けお育て続けてくださっているおはたらきのあらわれなのであります。

われ称え　われ聞くなれど　なもあみだ　連れてゆくぞの　親の喚び声
みほとけを　よぶわが声は　み仏の　われを喚びます　み声なりけり

前のおうたは原口針水和上。二つ目は甲斐和里子先生です。

“お念仏は阿弥陀さまやご往生くださった方々がお浄土から私を包む喚び声”なのであります。お盆のご縁を通して「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」と先立たれた方を偲びながら称えるけれども、その一声一声が間違いなしに何時でも私と一緒に居て私と共に生き続けてくださっているご往生くださった方々のお喚び声なのです。

合掌